

# RAILWAY & CINEMA

一九五五年公開のアメリカ映画の傑作である。特に日本で公開された五〇年代とリバイバル公開された六〇年代に青春を迎えた層からは、今でも圧倒的な人気がある。また筆者の記憶が正しければ、レナード・ローゼンマンによるそのテーマ音楽は、公開当時、ラジオのヒットパレードでほぼ一年間、トップの地位を譲らなかつたと思う。戦後のスーパーヒット作品の一つである。

「エデンの東」公開の前年、マローン・ブランドを起用した「波止場」でアカデミー賞を総なめにした脂の乗り切った頃のエリア・カザン監督がスタインベックの同名の小説を映画化したものであるが、この映画がこれだけ有名になったのは、主演のジェームズ・ディーンの魅力に負うところが大きい。作品は脚本、演出などどれも水準が高いが、ジェームズ・ディーンの演技がそれらの中でも際立っている。

ストーリーは、聖書のカインとアベルの物語を題材に、舞台を第一次世界大戦頃のアメリカの農村地帯に移し、謹厳な父の下、善良なアーロンとひねくれ者のキャル（ジェームズ・ディーン）の兄弟同士と父親との葛藤を描いたものである。キャルは、幼い頃亡くなったと聞かされた母（ジョー・ヴァン・フリート）アカデミー助演女優賞受賞）が実は隣町で怪しげな店を営んでいることを突き止めるが、純情なアー



## 「エデンの東」

1954年・アメリカ映画  
DVD 2枚組 ¥3,980 (税込)  
ワーナー・ホーム・ビデオ

## 鉄道と映画 — 22

孤独を抱えた青年の青春と家族の確執。  
ジェームズ・ディーンの初主演作。

EAST OF EDEN

# 「エデンの東」



## 文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション (FC) への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

ロンには教えない。父との間の溝は深まり、愛情に飢えたキャルは、父が事業で失った金を取り戻すことで、愛情を得ようと試みるが裏目に出る。自暴自棄になったキャルは、母の現実をアーロンに突きつけ、事態は破局に向かう。

新人ジェームズ・ディーンの演技あるいは才能は、マローン・ブランドがそうであったように、エリア・カザンの演出で一〇〇%開花し、美男とは言えないが、影を持った荒々しさと時折見せる繊細さが観客を虜にしている。今回改めてこの作品を観たが、余りにも殺伐となった現在の標準で見ると主人公キャルの行ったことは、それほどショッキングでもないように思える。しかし、その演技は、家族の愛に飢えている疎外された若者の寂しさを表現しており、今見ても第一級であり、魅力も衰えていない。助演の俳優たちの演技も冴えており、戦後のアメリカ映画の到達点の一つであると思う。

この映画は、いわゆる鉄道映画でないことは明らかである。にもかかわらず、三回映し出される鉄道の場面は、いずれも大変重要な意味を持つており、かつ印象的である。最初の場面は、キャルが母の住む町を訪ね、失望して戻ってくる時、列車の屋根の上で寒さから身を守るため、セーターに体を包み込んで丸くなっている。この場面は、キャルの心象とひ弱さを現しているようで、その印象は極めて強い。今回再見するまで、筆者は、このシーンが映画の出だしと記憶していたほどである。二回目は、鉄道のトラブルにより貨車が止まってしまい、父の精魂傾けたレタスが貨車の中で腐っていく場面である。最後は、絶望したアーロンが、軍隊に入るため列車で去る場面である。キャルの行動がアーロンにいかなる破局をもたらしたかが真正面から残酷に撮られている。このように物語の始まり、展開、結果を描くシーンがいずれも鉄道列車ないし駅を舞台としており、いずれの場面も大変丁寧に撮られて、見応え十分である。しかし、ジェームズ・ディーンの前では、これら秀逸な鉄道シーンすら一歩譲ってしまったと思う時がある。ご覧になっていない方は、ぜひ見ていただきたい。